

## なぜ「藤枝文学舎」か

白井 太衛

作家小川国夫氏が十歳から志太中時代まで、約七年間暮らした家の一部が復元できるかたちで保存されている。これを「藤枝文学舎」として設立して欲しいという市民運動へ、市側がなかなか腰をあげてくれないので、礎としての基金を寄せていただき、もって早期建設をめざしています。

この組織の軸である「藤枝文学舎を育てる会」は、多くの志太中～藤枝東高出身者を含む百数十人の発起人により昨秋に発足し、1991年末をメドに一千万円の募金を目標としています。

以降今日まで、発起人を中心としてご縁のある有志の皆さんから五百万円を越える金額を寄せていただいています。ただただ感謝。

しかし目標に達するまでの道のりは遠い。幸いここに同窓会のご理解により、貴重な紙面をお借りできることを力強く感じています。

わたしたちはそれぞれ共通の地縁、風土をもっています。さらに世代は異なっているにせよ恋を恋する年頃の思いでの学び舎があります。

小川国夫は昭和17年病気のため2年遅れて志太中に入学、学徒動員、終戦、戦後の初代生徒会長などを経験した。学び舎はまさに激動期でした。

いま還暦をむかえられた同窓の先輩諸氏には、とりわけ彼のエッセイに散見する恩師の横顔がその興行を覚えているだけに、親しいものに違いない。

また半自伝的な短編の連作『彼の故郷』には用宗の造船工場での動員体験がある。小説のきわだつ感性と肉付け、光と闇の複眼を醸成させたその酵母の時代は、この荒野でみがかれていたのだった。

いまそのあえぐ呼吸が伝わるように、文学というより人間の高峰をたどる作家の広大な裾野に志太平野があった、志太中があった。

藤枝はまた、藤枝静男の誕生の地でもあった。本名勝見次郎、明治41年下伝馬の大正亭の前にあった勝見



体育祭仮装

薬局に生まれる。志太中開校3年前の大正9年に東京池袋の成蹊学園に入学した。その彼もいま病床に在る。いたいたしい程、真摯に境涯を綴って、藤枝の土地と血族を小説化してきた。

さかのぼること70年も昔になるだろうか、焼津や藤枝の街の衆が銭を出し合ってこの学び舎（志太中）を建ててくれた。初代錦織校長はサッカーノムシだった。サッカーの街藤枝の源はそこにあった。いま、文学というより、山と川と海のある街道の志太平野に生業をもって暮らしてきた民の肉声を、親しく次の世代に伝言しなければならぬ。そのために文学舎の必要を呼び掛けたい。つまりサッカーに続くであろう「言霊の<sup>ことだま</sup>ある街、藤枝」を予知したいのだ。

ふるさとの活性化につながるささやかな市民運動の灯を、あの千南原の青春の力であかあかと燃やそうではないか。衷心より同窓生諸氏に願ってやまない。

礎基金代表世話人

(第28回卒)

基金振込先

藤枝文学舎「礎」基金	
<郵便局>	振替口座 名古屋 1-62643
<銀行>	静岡銀行藤枝中央支店 普通預金
	口座番号 0200814

### 編集後記

お読みいただいていたか。前回とは編集方針を変えまして、多くの同窓生の文章や作品を掲載し、ご意見や情報交換の場にしたと考えています。また、読みやすい体裁ということで、文字を大きくし、横書きにしてみました。尚、同級会等の記事は、今回は省略させていただきましたのでご了承下さい。

学校長の今泉先生が、この3月末で退職されます。本誌の所感でもうかがえますように、自由の気風と自主的活動を尊重し、柔軟な発想で学校運営をされました。あの爽やかな弁舌が聞けなくなることを惜しむ生徒や職員の何と多いこと。お元気で活躍下さい。

生活館の募金もあと一步、ご援助をお願いします。

